

平成14年度 校内共同研究計画

仙台市立黒松小学校

1. 研究テーマ

「一人一人が分かる喜びを味わい，自ら意欲をもって学ぶ児童の育成」
～算数の基礎・基本を確実に身につけさせるための指導の工夫を通して～

2. 主題設定の理由

本校教育目標から

本校では「豊かな情操と健康な体及び創造的な知性を養い，生きる力を備えた児童の育成」を教育目標に掲げている。学校教育の役割については様々に語られているが，端的に言えば知的な面への対応（学力保証）と集団生活を通しての人間形成（成長保証）の2つだと考える。

一人一人の思いや考えを深め，しっかりとした生きる力を育む根幹をなすものは，国語・算数等の教科で学んだ基礎的な知識や技能であり，それが「総合的な学習の時間」の基盤となり，さらにたくましく生きる力を伸ばしていく。

そこで，まず第一に「基礎的・基本的事項の確実な習得」，とりわけ学習に大きな差が出る算数の基礎・基本を確実に身につけさせるための工夫が必要と考えた。

児童の実態から

基本的な生活習慣や学習の習慣が十分身に付いていない児童や，基礎学力が低下している児童が各学年に少なからず見られた。特に基礎学力に関しては，個人差が大きく，学年が上がるにつれて上位群と下位群との差が広がる傾向があった。

13年春に実施した算数の新観点別到達度学力検査では，2・3年生までは全国通過率を上まわっているものの4年生を境に通過率が下がりはじめ，高学年ではさらに大きく低下している。また，低学年で学習する加減乗算などの基礎的・基本的な計算力が十分身につかないまま中・高学年に上がってくる児童も多い。

日常の指導の中では，力の差が大きすぎて「新しい単元の学習がスムーズに進められない」といった場面も見られる。そのため従来の一斉指導の学習形態では，どの子にも着実に力をつけさせることが難しいのが現状である。

以上のような実態から，算数の基礎・基本を確実に身につけさせるために，よりきめ細かに学習させていく個に応じた指導を推進する必要がある。そこで，今年度は児童一人一人に「分かる喜び」を味わわせ，児童自らが主体的に学習に取り組む算数指導のあり方を探りたいと考え，本主題を設定した。

3. 研究目標

児童一人一人に基礎・基本を確実に習得させるための指導方法をスキルタイム，TT や習熟度別グループ学習等を通して追究する。

4. 研究仮説

児童一人一人の学習状況を的確に捉え，グループ（個）に応じた指導法を工夫していけば，基礎・基本の力を確実に身につけ，意欲をもって主体的に学習に取り組む児童の育成が図られるであろう。

5. 平成13年度の取り組み

【基本方針】

- (1) 学習状況の把握：
 - ・新観点別到達度学力検査（教研式新 CRT-III）の実施
 - ・6月（算数：初年度のみ）、2月（国語、算数）
- (2) 年間35時間（週1時間）のスキルタイムを設定、全校体制で取り組む
 - ・国語：読む・書く・話す聞くのスキル、算数：基礎的な計算のスキル
- (3) 少人数グループ指導（3年生以上で実施）
 - ・3学級を4つの少人数グループに分け、担任と加配教員（1名）とで個に応じた指導を工夫して基礎・基本の定着を図る。
 - ・グループは単元ごとにレディネステストを実施し、その都度グループを再編成する。
- (4) 個別指導の時間を日課表に明記（火曜日の放課後）
- (5) 個に応じた評価の工夫
 - ・算数のあゆみ作成

【指導の方向性を修正】

- ◆ 先進校の研究ならびに視察（兵庫県朝来郡朝来町立山口小学校）をきっかけに本校の算数のスキルタイムを見直し、11月より全校でます計算に取り組む。
- ① 朝の打ち合わせをなくし、（打ち合わせは火曜日の夕方にした）始業前の15分間を活用して全校一斉にます計算に取り組む。
 - ② 2週間継続してデータを取る。合わせてます計算の効果を数値化し、児童の変容とその成果を見る。

<成 果>

(1) 少人数指導

- ・指導時間や内容を調整し、個に応じた指導を進めたことにより、どのグループも学習への意欲が高まった。
- ・特に下位群のグループを可能な限り少人数化したことで、学習の定着率が大きく向上した。

(2) ます計算

- ・ほとんどの児童が、自己ベストを目指して意欲的に取り組んだ。また、計算の速度・正答率をアップさせた。

「100ます計算」実施開始日と2週間後の比較*

学 年	1 年		2 年		3 年		4 年		5 年		6 年	
内 容	49ます計算		100ます計算		100ます計算		100ます計算		100ます計算		100ます計算	
実施日	11/27	12/13	11/27	12/13	11/27	12/13	11/27	12/13	11/27	12/13	11/27	12/13
～2分未満	0	8	0	1	0	5	1	16	2	20	0	0
2～5分	36	75	17	46	51	77	74	87	60	88	0	10
5～10分	62	39	70	42	34	4	30	8	46	3	6	57
10～15分	21	2	16	7	2	0	8	0			18	19
15分以上	7	2	3	3			2	0			64	1
正答率	92.0	96.0	98.8	99.1	99.1	99.5	98.4	99.0	98.4	99.7	93.9	98.3

(3) 個に応じた評価の工夫

- ・各学年ごと単元の到達目標や達成状況を知らせる「算数のあゆみ」を作成し、きめ細かな評価を行った。

その結果、一人一人の学習状況を児童や保護者に対し具体的に提示することが可能となり、児童の学習意欲を喚起したり、課題意識を持たせたりすることができた。

<課題>

(1) 少人数グループ指導について

○児童の自己評価を加味したグループ選択

- ・自分の力に合わないグループを選ぶ児童も少なくない。
- ・グループ内の学力差が大きくなるケースが見られた。
- ・グループの人数に偏りがでた。
- ・基礎学力の低いグループほど指導に時間がかかり、進度調整が難しくなる。
- ・少人数担当が、4学年にわたり1人で指導するのは負担が大きい。

○所属グループの変更

- ・単元ごとにグループを編成するための評価テストに時間がかかり算数指導そのものの時間が少なくなってしまう。

(2) ます計算について

- ・始業前にます計算を行ったため、朝の会の活動ができなくなる。

算数のあゆみ

【第1学期】

単元名	単元の目標	A	B	C
1. 分数のかけ算とわり算	・分数×分数、分数÷分数の意味と計算のしかたが分り計算できる。		○	
2. 分数のかけ算	・分数×分数のかけ算の意味と計算のしかたが分り計算できる。	○		
3. 分数のわり算	・分数÷分数のわり算の意味と計算のしかたが分り計算できる。		○	
4. 比と割合	・2つの数量の関係を表すのに、比や比の値を用いることが分る。 ・比を通して問題を解くことができる。	○		
5. 図形と図	・図形、図の性質や性質が分り、図形や図形をかくことができる。	○		
(児童の反省) グループ別になってからわかりやすくなった。人数が少ないので、聞きやすかった。 (保護書から) グループ別学習について、本人にとってはとてもよかったと感じています。少人数のおかげで先生の話をしっかり理解でき、本人のペースに合った進み具合でした。		保護書印		

【算数のあゆみ】の見方

- ・単元ごとの学習評価になっています。
- ・Aー「よくできた」Bー「できた」Cー「がんばろう」を表し、評価項目に○印をつけています。
- ・「児童の反省」には児童自身が、「保護書から」の欄には保護書の方が記入して下さい。また、保護書印を忘れずに押してください。

6. 14年度の方向性・努力事項

(1) 教育課程の再編

○行事の精選、カリキュラム、週時程表の見直し

- ・グループ別指導の関係上、3年以上の算数を学年全体で固定し、時間割に位置づける。
- ・スキルタイムを始業前の10分間に位置づけ、年間を通して継続指導（年間35時間）
- ・朝会及び各種集会を木曜日の5校時設定。
- ・朝の打ち合わせをなくし、木曜日の夕方に設定。WEB 掲示板を立ち上げ、日常の連絡調整を行う。

(2) スキルタイムの充実

- ・ます計算の反復訓練による計算力の向上

1～2年：週2回、朝の10分間の時間を設定

3～6年：算数のはじめの5分間を各グループごと毎回実施

- ・読み書きの習熟

全学年週2回：読書、漢字、ことばの意味調べなど

- ・学級の実態に応じたスキル

3～6年：週2回 スピーチ、コミュニケーション能力の育成など

(3) 習熟度別グループ指導

- ・名称を「算数グループ別指導」と変更し、3年生以上の学年において実施する。
- ・習熟度別グループ編成とする。13年度2月の学力テスト、日常の算数の学習状況などから前担任が総合的に判断し、3月中に児童・保護者に連絡をする。
- ・学年を5～6グループに分け、担任と加配教員2名とを加えて指導にあたる。

- ・グループと指導者を基本的には固定する。ただし1年間をⅠ期（4～7月）、Ⅱ期（8～12月）、Ⅲ期（1～3月）に分け、教師の判断でグループ移動を可能にする。

（４）特殊学級との交流

- ・グループの中での指導が難しい児童、更なる個別指導の必要な児童は、保護者の承諾を得て、算数と国語の時間のみ特殊学級に通級させ、個別の計画に基づくきめ細かな指導を受けられるようにする。（いわゆる逆交流）

（５）基礎・基本の手引き書作成

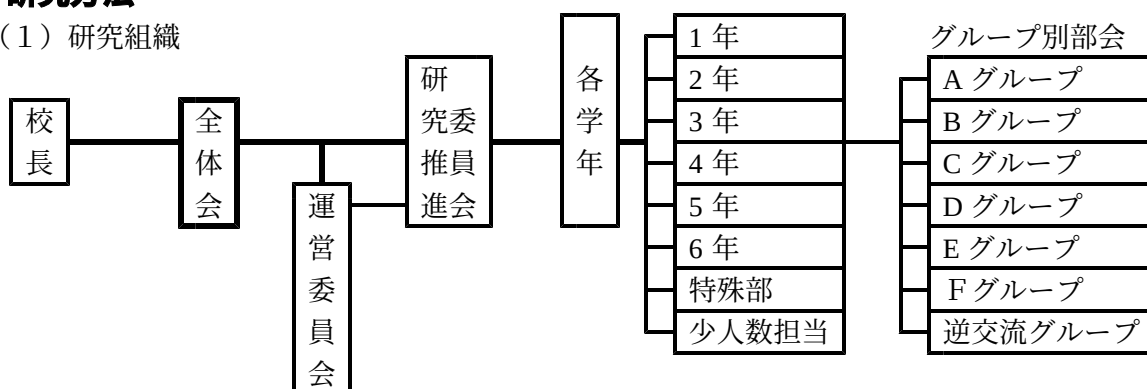
- ・国語、算数についてどの児童にも確実に習得させたい内容を学年別に作成する。

（６）評価の工夫

- ・前年度の学力検査の分析を行い、指導の方向性を探る。また、個々の児童のテスト結果をデータベース化し、継続的に児童の習得状況・変容を捉えられるようにする。
- ・「算数のあゆみ」を年3回長期休業前に配布し、家庭の協力を得られるようにする。
- ・児童の自己評価や相互評価を取り入れながら、自己の学習を振り返らせ、以後の学習活動に見通しを持って取り組めるようにする。

7. 研究方法

（１）研究組織



※ 必要に応じて特別部会や学年部、縦割り等に組み替えを行う。

<グループ別部会>

（Ａ）習熟度５グループ（３・４・６年）

学年	A グループ	B グループ	C グループ	D グループ	E グループ
1 年			佐藤千	鈴木・志賀	黒須・奥山
2 年		加藤裕		石堂・猪股	櫻田
3 年	薄井	藤田	大山		
4 年	関	小野	八巻		
5 年	五十嵐	後藤	金子・清野		
6 年	工藤	横橋	栗原		
特殊	高悠	成瀬		植西	森・菅原
少人数				小山（3年はE）	安達（3年はD）
その他	三塚				

（Ｂ）習熟度６グループ（５年）

学年	F グループ	E グループ	D グループ	C グループ	B グループ	A グループ	交流グループ
1 年			佐藤千	鈴木	志賀・奥山	黒須	特殊教育部 菅原 森 植西 高悠 成瀬
2 年		加藤裕		石堂	猪股	櫻田	
3 年	薄井	藤田	大山				
4 年	関	小野		八巻			
5 年	五十嵐	後藤	金子	清野			
6 年	工藤	横橋	栗原		小山		
少人数						安達	
その他				加藤恵	（平山）	三塚	

(2) 研究の進め方

- ① 学年ごとの取り組みを基本とする。
- ② 担当するグループごと縦割りの特別部会を設置し、グループ指導に関する情報交換、指導法などについて研究を深める。
- ③ 提案授業、研究全体会以外にもそれぞれの取り組みを積極的に公開し、互いに研修を深める。

8. 校内研究年間スケジュール

	内 容
4 月	研究計画立案 ・第1回研究推進委員会（研究の方向性） ・職員会議（校内共同研究計画について共通理解） ・実態調査（児童の意識調査・13年度標準学力検査の分析） 授業実践
5 月	・第2回研究推進委員会（研究主題、仮説等の修正、全体会の計画） 研究全体会 （学年研究の取り組み状況報告、指導課訪問に向けて） （スキルタイム、グループ指導の情報交換）
6 月	基礎・基本の手引き書完成 6/7（提案授業1）・・4年生 ・第3回研究推進委員会 研究全体会 ・指導案作成 ・指導課訪問 6/27（提案授業2）・・5年生
7 月	・第4回研究推進委員会 算数のあゆみ検討 ・算数のあゆみ発行（第1回）
8 月	・第5回研究推進委員会
9 月	・第6回研究推進委員会 研究全体会 ・グループ指導に関する問題点の洗い出し、方向の修正
10 月	スキル学習会 10/30（提案授業3）・・1年生
11 月	・第7回研究推進委員会 11/27（提案授業4）・・2年生
12 月	・第8回研究推進委員会 ・算数のあゆみ発行（第2回）
1 月	・研究のまとめ ・第9回研究推進委員会 ・次年度の方向性を検討 研究全体会（今年度のまとめ、報告会）
2 月	↓ ・第10回研究推進委員会（次年度の方向性） ・新観点別到達度学力検査実施 研究全体会（次年度の方向性について） ・算数のあゆみ発行（第3回）